

My First Stage

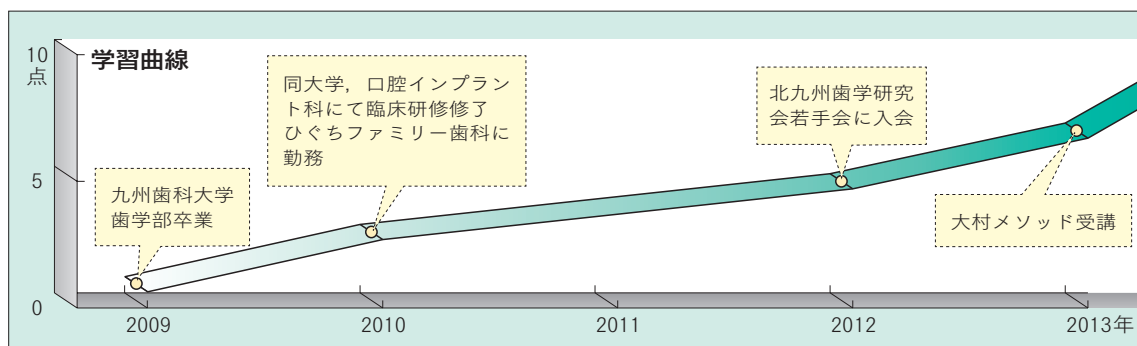
審美性，機能性を求めた総義歯臨床

廣田哲哉

キーワード：審美性，機能性，総義歯臨床

臨床経験年数

卒後4年目。2009年九州歯科大学卒業後，同大学第二補綴学講座，口腔インプラント科にて臨床研修を行う。臨床研修終了後，ひぐちファミリー歯科に勤務し，現在3年目。北九州歯学研究会若手会に所属している。



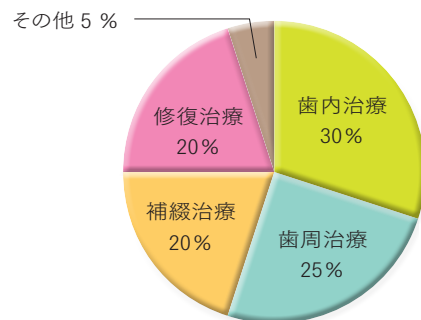
診療方針

歯科医療は生活の医療であり，患者の健康長寿が目的と考えている。そのため，“機能的で審美的，そして可能な限り心地よい治療”をめざして診療を行っている。

日々の臨床

患者は小児から高齢者までと，年齢層は幅広い。咬合崩壊といえる患者も少なくなく，自由診療・保険診療にかかわらず全顎治療が必要となることが多い。重度歯周疾患，多数歯欠損の患者とは必然的に長期間の付き合いとなるので，信頼関係の構築が求められる。

【日常臨床で頻度の多い割合】



スマートフォンアプリ
「QuintMobile」
無料公開中!

誌面で紹介しているテクニックなどを動画で理解できます。

「QuintMobile」は無料ですが，動画再生にデータ通信料が発生します。ハケット定額サービスでのご利用を推奨します。動画再生のサービス提供期間は，本誌発刊月から原則2年間となります。

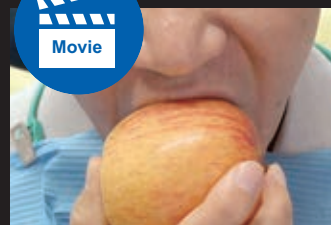
1 アプリをダウンロード

iPhoneをご利用の方は，Apple AppStoreにて「QuintMobile」(無料)を検索し，インストール。Androidをご利用の方は，Google Playにて「QuintMobile」(無料)を検索し，インストール。

QuintMobile 検索

2 アプリのついた写真を写す

アプリを起動し「QuintMobile」マークのついたページをカメラに収まるようにかざします。関連した動画などのコンテンツが起動します。(動画再生開始まで，数秒かかります)



企画趣旨

患者の主訴や口腔内の状態など、その背景はさまざまであるが、「1 歯の治療にこだわること」、それがすべての基本であり、はじめの1 歩といえよう。

本欄では、患者の背景を踏まえつつ1 歯に対する治療にこだわる若手歯科医師に、どのように診査・診断し、治療計画を立て、治療結果を得たのか、その患者と信頼関係を築くまでの過程を自己評価も含めて提示いただく。また、師匠や先輩歯科医師からのメッセージもあわせて掲載。

医療は生活に出会っているか

廣田 哲哉

Tetsuya Hirota

ひぐちファミリー歯科
連絡先：〒820-0066 福岡県飯塚市幸袋140-1



初診時の状態



図 1a~c ②は初診当日に抜歯、同日に旧義歯を修理した。咬合平面の乱れと咬合高径の低下を認めた。

患者のバックグラウンド

- 患者：62歳，男性。会社員。明るい性格である。
- 主訴：下顎右側の歯がグラグラしており、咬むと痛いので抜いてほしい。左側の歯は最後の1 本なので残してほしい。
- 歯科的既往歴：数年前より歯の動揺を自覚しており、前医に勧められるまま抜歯と補綴治療を受けていた。

「一度歯を抜いてから、つぎつぎと抜く必要があるといわれ、あっという間に現在の状況になった」とのことであった。義歯を作り直す必要性は感じておられた。全身的既往歴は高血圧，糖尿病，腎臓病。

■治療への理解度：週に1 回程度の来院が可能で、自費治療を検討してもよいとのことであった。

診査・診断，治療計画

■どのように診査を進め、診断したか：欠損部が広がっていった原因は、患者の現病歴から重度歯周病と咬合性外傷と推測した。治療計画としては、天然歯にかかる力を考えてオーバードンチャーによる補綴を選択。③相当部位にインプラントを埋入し、左右の支持力のバランスを整えたいと考えた。天然歯、インプラントに強い側方力をかけないように、アタッチメントには磁性アタッチメントを選択。また義歯の横揺れを防ぐため、半調節性咬合器を用いてバランスドオクルージョンを与えることをめざした。

顎になってしまうことを理解されていた。最後の1 本の歯をなるべく長期に保存・機能させるための治療計画であることを説明し、治療の必要性を理解していただいた。

■診査結果および治療計画説明時の患者の反応：患者はこれまでの経緯から、このままでは近いうちに無歯

■治療の実際：パイロットデンチャーではタッピングは安定していたが、側方運動時の義歯の横揺れを惹起してしまった。また前方運動時に前歯で薄いものが噛み切れないとの訴えがあった。インプラントの生着を待ち、最終補綴物製作へと進んだ。ゴシックアーチを用いて下顎位を設定し、チェックバイトを用いて顎路調節を行うことによって、患者の限界運動と咬合器上での運動との近似をめざした。

My First Stage

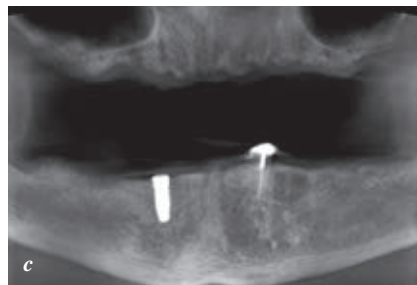


図 2a~c 天然歯の処理とインプラント。アタッチメントは二次う蝕のリスクが高いと考え、適合には十分注意をした。インプラントは天然歯とのバランスを考え、埋入位置、深度に注意して行った。

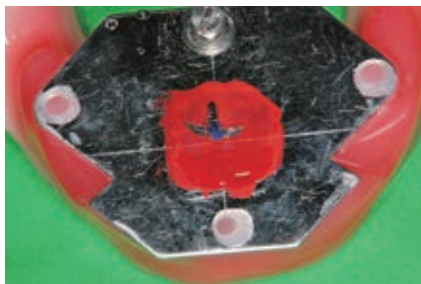


図 3a ゴシックアーチを用いて下顎位を設定。

図 3b チェックバイトにより顎路調節を行った。

図 3c 咬合器上での両側性の平衡咬合を確認し、試適後、重合操作へ移った。



図 4a,b 義歯完成時。審美性を考慮し、歯肉着色を行っている。

図 4c 口腔内装着時(技工担当：愛歯・上野誠先生)。



図 5a | 図 5b | 図 5c

図 5a~c 顔貌の変化。a：初診時。b：パイロットデンチャー。c：ファイナルデンチャー。



図 6 | 図 7

図 6 フードテストで使用したリンゴ。
図 7 吸着や機能運動の実際をまとめた動画。

治療結果の自己評価と患者の様子

■自己評価：審美的、機能的には及第点の治療ができたと考えている。しかし、下顎義歯の吸着を得るために設定したボーダーが、少し広すぎたのではないかと感じている。今回は幸いにも患者が許容してくれたが反省点である。

■患者との信頼関係が築けたと感じた瞬間：信頼関係が築けたとってよいかはわからないが、「何でも咬めるよ、ありがとう」とってくれたときは、とても嬉しかった。

■今後の課題：フルマウスの治療を行う場合の咬合高径について明確な基準をもつことができていない。高めに設定すれば顔貌は若くみえる。しかし、患者によっては顎が疲れるといわれる場合があった。アンチエイジングとして高めに設定したい気持ちはあるが、加齢とともに低く設定していくほうが優しい治療なのかとも考えている。今後はデータを集積しながら、明確な基準を作っていきたい。

先輩 Dr. からのメッセージ



大村 祐進

1985年 福岡歯科大学卒業
1989年 おおむら歯科医院開設
福岡歯科大学臨床准教授、日本審美歯科協会副会長、日本歯周病学会専門医、日本顎咬合学会指導医、日本臨床歯周病学会認定医、日本口腔インプラント学会会員、北九州歯学研究会会員、JACD 会員、KIM 会員

〔治療方針〕

診査・診断、治療計画から補綴前処置を経て補綴処置に至る行程を、無理無駄なく、合理的に関連づけた、総合的かつ体系的な歯科治療をめざしている。

▶ケースから感じること

廣田先生は、私の北九州歯学研究会の後輩にあたる、樋口琢善先生の医院に勤務すると同時に、北九州歯学研究会若手会に所属して研鑽を積んでこられた。仕事に対する真摯な姿勢と、目の輝きが印象的な青年歯科医である。

廣田先生のような若い歯科医師が、My First Stage の題材として「総義歯」を選択し、両側性の平衡咬合を付与しようとしていることは、非常に興味深い。総義歯臨床において、両側性の平衡咬合は王道的咬合論であり、これを否定する歯科医師はいないであろう。両側性の平衡咬合は、総義歯の維持・安定に有効であるばかりか、顎堤の健全保持のためにも重要であり、患者も優れた装着感を得ることができるものと思われる。

しかしながら、臨床で両側性の平衡咬合を付与することは容易ではなく、咬合と咬合器に関する幅広い知識と技術が不可欠である。咬合平面の傾斜角、顎路角、切歯路角、咬頭傾斜角、調節湾曲に加え、歯軸に対する深い理解がなければ、機能性と審美性の両立は到底なしえない。総論的な思考が求められるために、ミクロ的な治療がトピックスとなりがちな現在、逆に、若い歯科医師が取り組む題材としては価値あるものであろう。

▶さらに成長してもらうためのメッセージ

付属の動画をみると、磁性アタッチメントを装着する前の下顎の総義歯には十分な吸着が得られているようである。廣田先生は、3相当部にインプラントを使用して、下顎左側の天然歯との支持力のバランスを整えたいと書かれている。磁性アタッチメントを装着すると、残存歯、インプラント、そして歯槽堤が支持を担うことになり、この義歯は可撤性部分床義歯としての性質を帯びてくる。しかしながら、下顎左側の残存歯の支持骨は十分ではなく、残遺歯槽堤にも左右差がある。被圧変位量の異なる3者による複雑な支持型式となり、かえって下顎総義歯の維持・安定に悪影響を及ぼすことになるのではなからうか。そして、長期的には、残存歯、インプラントに対する過重負担による骨吸収、あるいは、インプラントを支点とした義歯の破損なども懸念される。下顎左側天然歯は、歯槽骨の保全のために保存してリリースを行い、総義歯として吸着させたほうが、良好な維持・安定を長期的に得られるのではないかと考える。

今後も研鑽を重ね、さらなるステップアップを願っている。

本欄に対するご意見・ご質問は、本誌編集部：edit-q@quint-j.co.jp までお寄せください。